

令和七年度　社会人特別選考（Ⅰ期）入学試験問題

11月10日(日)

神道文化学部

小論文

－注意事項－

- 1 問題は3ページ、解答用紙は1枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
- 3 試験時間は90分である。

Q24A

問 以下は、神道学者の安蘇谷正彦氏の文章である。「神道的生き方」についての筆者の主張を四〇〇字程度で要約しなさい。その上で、筆者の主張を参照しつつ、自分であれば「神道的生き方」とはどのようなことと考へるか、意見を六〇〇字程度で述べなさい（自分が経験したことや、今後神道文化学部で学びたいことと関連させつつ、具体的に述べること）。

神道古典の中からどのような人倫の原理や生き方が抽出できるか、考へてみたい。代表的神道古典である『古事記』『日本書紀』を中心に眺めてみると、神々の御意志が具体的に如何なるものであるか、という重要な見解が示唆されている。それがなぜ重要であるかと言えば、神道信仰の核は神々を信じることであるのは言うまでもない。その神々がどのような御意志を有しているかは、神道古典以外はなかなか捉え難いからだ。そこで神の御意志を窺わせるもつとも有名な伝承を、二つ取上げてみたい。一つは国土の修理固成の命令であり、二つ目は天壤無窮の神勅である。

周知のことと思われるが、国土の修理固成の命令は、『古事記』上巻にみえる。天地開闢の時に、天之御中主神をはじめ神々が出現し終わりにあらわれた伊邪那岐・伊邪那美二神が、天つ神から「是の多陀用弊流國を修め理り固め成せ」（この漂つてゐる国を整えてしっかりと作り固めよ）と命令されたことを指す。この命令は二柱の神が天つ神から命じられたのであるから、われわれ一般の人間とは無関係と言えなくもないが、神々の御意志が国土の修理固成にあつたことは明白である。神々の御意志を信奉するのが神道者である限り、神道的生き方の一つは国の修理固成に尽力することだと言つてよからう。そうした古代におけるクニの概念は、自分たちが生活を営む共同体・村・町・国家などを指すと考えられるので、共同体の維持・発展に尽力することが、神道的生き方の一つにならう。

二つ目の天壤無窮の神勅とは、天照大神の孫にあたる瓊々杵尊にぎのみことが高天原から中津国（日本列島）へ天降る時に、天照大神から命じられた御言葉である。『日本書紀』卷二に「はうそ宝祚之さかえさんこと隆まさに當下與あめつちともに二天壤きわまりなからべし一無上むじょう窮者矣」とみえる。この意味は、天皇の御位は天地と共に永遠であることは、国家と解される。戦前國學院大學学長であった河野省三は氏の代表的著書『神道の研究』の中で、統治者たる天皇の御位が永遠であることは、国家の平和と国民の幸福が永遠であることと同義と説いた。筆者も河野説に賛同したい。なぜなら、天皇が宮中三殿でみずから神々や皇靈こうれいを祭り祈願される内容は、ひたすら国家の平穏と国民の福祉の実現にあるからだ。このように捉えて大過ないとすれば、神道古典を通して窺える神々の御意志は国家の平和と国民の福祉にあり、神道的生き方はそのために尽力すべきことが神々から要請されているということになる。

祭りの伝統から神道的生き方を抽出してみたい。神道は祭りの宗教と称されるほど、祭りの占めるウェイトが高いと言えよう。神道の起源ないし形成が、稻をはじめとする五穀の豊穰を神々に祈り、その稔りを神々に感謝する祭りから出発していると推測されるからである。神道の祭

りを一言でいえば、神々への奉仕と規定されよう。そして神道の祭りの特色は、村・町・国家など共同体の諸問題を解決するために、共同体の人々が元来は全員で神々に祈り感謝することにあつたと思われる。諸問題の中でもっとも重要なことは、食糧の取得であつたことは言うまでもなかろう。稲米をはじめとする五穀が稔るかどうかは、自然の運行に左右された。太陽をはじめ自然の運行を支配するのが神々であつたといふ信頼があつたから、祭りが厳肅に執行されたと言えよう。年間の祭りに関するもつとも古い事例を記録の上でもとめると、七〇一年に編纂された『大宝律令』所収の神祇令（じんぎりりょう）（神々に関する規程）と推測される。そこには、以下のような祭りがみられる。春に五穀の豊作を祈る祈年祭（きねんさい）、あるいはとしごいのまつりがあり、秋には新嘗祭（しんじょうさい）、あるいはにいなめのまつり）といつて、豊穣を神々に感謝する祭りがある。夏には、田に水が行きわたるように祈る大忌祭（おおいみのまつり）や台風や水害などによつて農業の妨害がないように祈る風神祭がみえる。そして神祇令に記載されている十九例の祭りのうち、七割が農耕に関する祭りである。農耕以外の祭りの例を一二あげると、春に行われる鎮花祭（ちんかさい、あるいははなしづめのまつり）は、桜の花が咲き散る頃、邪靈によつて種々の病気が流行するのでそれを鎮めるために行われる祭りである。また夏に行われる道饗祭（みちあえのまつり）は、都の東西南北の四隅で執行される。その目的は都にやつてくる邪靈や荒ぶる神を、あらかじめ迎えて食物を供え都に入らないように祈るという。

以上のように祭りの基本型と称すべき神祇令記載の祭りの諸例を眺めてみると、神道の祭りは個人のためではなく、共同体全員のために奉仕するということが、基本的特色となつてゐる。その意味で祭りを通して神道的生き方を抽出しようとすれば、共同体全体のために奉仕ないし尽力することと捉えてよからう。

続いて、神社史を通して、神道的生き方の具体的な内容を考えてみたい。神社崇拜の長い歴史の中で、他宗教においてはあまり見かけない特色が、人を神に祭る伝統である。人を神として祭るという日本人の神道的行为は、時代とともに変化し、第二次世界大戦以後現在に至るまでほとんど衰退している。明治以後キリスト教の神観念が日本人の間に徐々に浸透し、神とは全智全能の絶対神をイメージする日本人が増加した。そのため人間が神になることは有り得ない、と思うようになつたのが一つの要因であろう。

古代においては例が少ないが、藤原鎌足（談山神社）、菅原道真（天満宮）などが、神として祭られた。近世においては有名・無名の人々が村・藩・国家など共同体の安寧のために尽力したことによつて、神に祭られている。有名な例としては豊臣秀吉（豊国神社）、徳川家康（東照宮）、初代会津藩主保科正之（はにつしゆくまほしゆくま）（土津神社）、薩摩藩主島津斉彬（照国神社）などが挙げられる。また近代においては、とくに天皇や国家のために尽瘁し、その功績が著しい人々、たとえば楠木正成（湊川神社）、明治天皇（明治神宮）、乃木希典（乃木神社）、東郷平八郎（東郷神社）、戦没者（靖国神社）など周知の通りであろう。これらの人々のうち、菅原道真は怨霊神としてはじめ祭られたため、その他の例と異なつてゐる。道真以外の

人々は、ほとんど藩や国家など共同体の平和や発展のために尽力した、と言つてよい。このように考えてみると、神社史の重要な一つの特色といえる、人を神に祭る行為の中に、神道的生き方が窺われる。すなわち、共同体の平和や発展のために尽力することである。その意味では、前述した祭りの伝統を通して捉えられる奉仕の精神と一致することが了解される。

（安蘇谷正彦氏の文章に基づく）